

第1章

聖者たちの質問

第1節

ॐ नमो भगवते वासुदेवाय
जन्माद्यस्य यतोऽन्वयादितरतश्चार्थेष्वभिज्ञः स्वराट्
तेने ब्रह्म हृदा य आदिकवये मुह्यन्ति यत्सूरयः ।
तेजोवारिमृदां यथा विनिमयो यत्र त्रिसर्गोऽमृषा
धाम्ना स्वेन सदा निरस्तकुहकं सत्यं परं धीमहि ॥ १ ॥

オーム ナモー バハガヴァテー ヴァースデーヴァーヤ
om namo bhagavate vāsudevāya

ジャンマーディ アッシャ ヤトー ンヴァヤードウ イタラタシュ チャールテヘーシュヴ アビヒギヤハ スヴァラートゥ
janmādy asya yato 'nvayād itarataś cārtheṣv abhijñāḥ svarāṭ

テーネー ブラフマ フリダー ヤ アーディ・カヴァイエー ムヒヤンティ ヤトウ スーラヤハ
tene brahma hṛdā ya ādi-kavaye muhyanti yat sūrayaḥ

テージョー・ヴァーリ・ムリダーンム ヤタハー ヴィニマヨー ヤトウラ トウリ・サルゴー ムリシャー
tejo-vāri-mṛdām yathā vinimayo yatra tri-sarga 'mṛṣā

ダハムナー スヴェーナ サダー ニラスタ・クハカンム サチャンム パランム デヒーマヒ
dhāmnā svena sadā nirasta-kuhakaṁ satyaṁ paraṁ dhīmahi

om—主よ; namaḥ—私の敬意を表す; bhagavate—人格主神に; vāsudevāya—ヴァースデーヴァ (ヴァースデーヴァの子)、すなわち主シュリー・クリシュナ、根源の主; janma-ādi—創造、維持、破壊; asya—具現された宇宙の; yataḥ—その方から; anvayāt—直接に; itarataḥ—間接に; ca—そして; artheṣu—対象; abhijñāḥ—すべてを認識している; sva-rāṭ—完全に独立している; tene—さづけられた; brahma—ヴェーダの知識; hṛdā—心の中の意識; yaḥ—～である者; ādi-kavaye—最初に創造された生物に; muhyanti—惑わされる; yat—～である者について; sūrayaḥ—偉大な聖者や半神; tejaḥ—火; vāri—水; mṛdām—陸地; yathā—～と同じ程度に; vinimayaḥ—活動と反動; yatra—～に対して; tri-sargaḥ—創造された三様式、創造する能力; amṛṣā—ほとんど事実の; dhāmnā—すべての超越的物事とともに;

svena—自ら充実して; *sadā*—つねに; *nirasta*—不在による否定; *kuhakam*—幻想; *satyam*—真実; *param*—絶対的な; *dhimahi*—私は瞑想する。

主よ。ヴァスデーヴァの子、シュリー・クリシュナよ、遍在する人格主神よ、あなた様に尊敬の礼をささげます。

私は主シュリー・クリシュナを瞑想する。主は絶対真理者、そして具現された宇宙の創造・維持・破壊にかかわるすべての原因の最古の原因だからである。主は、創造された一切万物を直接・間接に認識しており、主を生じさせた原因が主以前には存在しないため、主は自主独立された方である。原初の生物であるブラフマジーの心に、ヴェーダの知識を最初にさずけた唯一の方でもある。火のなかに見られる水、水の上に出現する陸地という錯覚現象によって人がまどわされるように、偉大な聖者や半神でさえ主の力によって幻惑される。物質宇宙は自然の三様式が相互に作用しあって一時的に作りだされ、実在しない世界であるにもかかわらず、主の力ゆえにほんとうに存在しているように見える。ゆえに私は、物質界にある幻影とは永久に無縁の超越的住居でとこしえに生きる主シュリー・クリシュナを瞑想する。主は絶対真理者であるゆえに、私は主を瞑想する。

要旨解説

人格主神ヴァースデーヴァへの敬意は、その名前がしめすとおり、ヴァスデーヴァとデーヴァキーの神々しい愛息である主シュリー・クリシュナに向けられています。この事実は、『シュリーマド・バーガヴァタム』をとおしてさらに明確に描写されていきます。シュリー・ヴァーサデーヴァはこの節で、シュリー・クリシュナが根源の人格主神であり、その他一切は主の直接あるいは間接の完全分身か、あるいは分身の分身であると断言しています。シュリーラ・ジーヴァ・ゴースヴァーミーは、この主題について自著『クリシュナ・サンダルバ』でさらに詳しく説明しています。最初の生物であるブラフマーも聖典『ブラフマ・サムヒター』でシュリー・クリシュナについて余すところなく説明しています。『サーマ・ヴェーダ・ウパニシャッド』にも、主シュリー・クリシュナはデーヴァキーの神聖な愛息であると述べられています。ゆえに、この節の祈りでは「主シュリー・クリシュナは根源の主である」という見解で始まっていることから、絶対人格主神を指す特別の言葉があれば、それは「すべてを魅了する方」という意味を持つ「クリシュナ」を指しているはずです。主は『バガヴァッド・ギーター』の多くの箇所ですら「根源の人格主神」と断言しており、アルジュナも、そしてナーラダ、ヴァーサ、その他大勢の偉大な聖者たちもこぞってそのことを明言しています。『パドマ・プラーナ』では、主の無数の名前のなかで「クリシュナ」が筆頭の名前である、と述べられています。

ヴァースデーヴァ (Vāsudeva) は人格主神の完全分身の名前ですが、主のその他すべての姿もヴァースデーヴァと等しいことから、この節で使われています。ヴァースデーヴァという名前は特に、ヴァースデーヴァとデーヴァキーの神聖な子として述べられています。シュリー・クリシュナは、放棄生活者のなかでも完成を達成した人物・パラマハンサ (paramahansa) たちによってつねに瞑想されています。

ヴァースデーヴァ、すなわち主シュリー・クリシュナはすべての原因の原因です。存在するものすべては主から放出されました。その根拠が後の章で明らかにされていきます。『シュリーマド・バーガヴァタム』は、マハープラブ・シュリー・チャイタンニャによって「非のうちどころのないプラーナ」として表現されていますが、それは人格主神シュリー・クリシュナに関する超越的な描写が収められているからです。『シュリーマド・バーガヴァタム』の起源も輝かしい栄光に満ちています。シュリー・ヴァーサデーヴァが超越的知識を円熟させたあとに編纂した書物であり、自らの精神指導者シュリー・ナーラダジーの教えに従って書きあげました。最初にヴァーサデーヴァは、ヴェーダの4区分、『ヴェーダンタ・スートラ』(別名『ブラフマ・スートラ』)、各プラーナ、『マハーバーラタ』などを含むすべてのヴェーダ経典を編纂したのですが、心のどこかに満たされない思いを感じていました。その不満を見抜いた精神指導者ナーラダは、主シュリー・クリシュナの超越的な活動について書くよう助言したのでした。その超越的な活動は、特に第10編で描写されています。しかし、その活動の真髄に辿りつくためにも、読者は各編・各章にちりばめられた知識を習得しながら着実に読み進まなくてはなりません。

探求心のある人なら、創造された世界の根源を知ろうとするものです。夜空に浮かぶ星々を見て、そこに住む生命について思いを馳せるのはごく自然な感情のあらわれです。人間は動物よりも優れた高度な意識を持っていますから、心にそのような質問が湧きおこるのは当然です。『シュリーマド・バーガヴァタム』の著者は、その質問に的確に答えています——主シュリー・クリシュナは全創造界の根源である、と。主は創造するだけではありません、破壊もします。作りだされた宇宙自然界は、主の意志によって特定の周期にもとづいて創造されます。一定期間維持され、やがて主の意志によって消滅します。すなわち、宇宙の機能の背後には至高者の意志がある、ということです。もちろん、創造者の存在を信じない種々雑多な無神論者がいますが、貧弱な知識ゆえの結論にほかなりません。たとえば、現代科学者は人工衛星を作りましたが、科学技術を駆使して作られた衛星が宇宙空間に向けて発射され、地上にいる科学者の遠隔操作でしばらく飛びつづけます。同じように、無数の星や惑星が漂う宇宙は人格主神の知性で管理されているのです。

ヴェーダ経典では、絶対真理者、人格主神は全生命体の筆頭者である、と述べられています。最初に創造された生物・ブラフマーから最小の蟻にいたるまで、生命体はすべて個別に存在しています。そしてブラフマーの上にさえ独自の能力をそなえた生命体たちも存在しており、また人格主神も同じ生命体です。他の生命体が個別の存在であるように、人格主神も個別の存在です。しかし至高主、すなわち至高の生命体は至高の知性を持ち、私たちの想像を絶する多彩かつ無上の力をそなえています。人間の頭脳が人工衛星を作りだせるのですから、同じような素晴らしい機械をはるかに優れた機能で作りだせる人の頭脳がどれほど高いかかんたんに想像できるはずです。分別のある人にはこの話は通じるでしょうが、認めようとしめない意固地な無神論者がいるのも事実です。しかし、シュリーラ・ヴァーサデーヴァはその最高の知性をパラメーシュヴァラ (*parameśvara*) としてためらうことなく受け入れ、*para* (パラ) と *parameśvara*、すなわち「最高人格主神」と表現してその知性の所有者に敬意を表しています。そのパラメーシュヴァラがシュリー・クリシュナであり、そのことはシュリー・ヴァーサデーヴァが執筆した『バガヴァッド・ギーター』や他の経典、特に『シュリーマド・バーガヴァタム』のなかで認められています。主は『バガヴァッド・ギーター』で、わたし以外に *para-tattva* (パラ・タットヴァ・至高善) は存在しない、と言っています。ゆえにシュリー・ヴァーサデーヴァは、パラ・タットヴァ、すなわちシュリー・クリシュナを無条件に礼拝しています。シュリー・クリシュナの超越的活動はこの書物の第 10 編で述べられています。

不謹慎な人たちはいきなり第 10 編から、とくに主のラーサ・ダンスを描写している 5 つの章から読みはじめます。この部分にはもっとも秘奥な描写が含まれており、主の崇高な知識を会得していなければ、ラーサ・ダンスと呼ばれる主の超越的な娯楽やゴピーたちとの情愛あふれる親交のことを必ず誤解します。きわめて高潔な主題であるため、徐々に達観してパラマハンサの境地に入った人物だけがラーサ・ダンスの超越的な真義を味わうことができます。ですからシュリーラ・ヴァーサデーヴァは、読者が主の娯楽の真髓を正しく味わえるように、徐々に精神的悟りを高められる段取りを用意しています。その理由から、この節にはガーヤトリー・マントラ (*Gāyatrī mantra*) のなかの *dhimahi* (ディーマヒ) という言葉が意図的に使われています。ガーヤトリー・マントラは精神的に高められた人のために用意されています。その唱え方を習得したときに、主の超越的な立場が理解できるようになります。そのためにも、ブラーフマナの気質をそなえ、ガーヤトリー・マントラを正しく唱えるために完全な徳性の様式に立脚しなくてはなりません。その結果、主、主の名前、名声、質などを悟る超越的な境地に入ることができるのです。

『シュリーマド・バーガヴァタム』は、主の内的力によって現わされた主のスヴァルーパ (svarūpa) に関する記述であり、この力はいま私たちが経験している物質宇宙を作りだした外的力とは異なる力です。シュリーラ・ヴァーサデーヴァはこのシュローカで2つの力を明確に区別し、現わされた内的力は真実であり、いっぽう物質存在として作りだされた外的力は砂漠の蜃気楼のように束の間の幻像である、と述べています。砂漠の蜃気楼のなかにほんとうの水はありません。あるかのように見えているだけです。水は別のところにあります。現わされた宇宙創造界は現実のように見えるだけで、この幻影の影を作りだしている現実は精神界にあります。絶対真理者は、物質界ではなく精神界に存在しています。物質界にあるものはすべて相対的な真実です。つまり、この世界の真実は別の条件に応じて真実と判断されるということです。物質宇宙界は自然の三様式の相互作用の産物であり、その一時的な現象は、ブラフマー、インドラ、チャンドラなどの高等な半神を含む多くの生物種として現われる条件づけられた魂の当惑した心に、真実の世界の幻影として映るよう作られました。物質界に真実はありません。人格主神が崇高な世界で暮らしている永遠な精神界に真実があるからこそ、現実に見えているにすぎないのです。

建築技師は複雑なビルを設計しても現場の労働にはかかわりませんが、作業工程の一切を指揮するため、そのビルのどこになにかがあるかを知っています。その建築物のすべてを直接・間接に把握しているということです。同じように、宇宙創造界の最高技師である人格主神は、宇宙の管理が半神たちにまかされていても、宇宙の構造を細大漏らさず知っています。物質界では、ブラフマーから小さな蟻にいたるまで、独立している生物はいません。主の支配の手はどこにでもみられるのです。物質の構成要素も、精神的な火花も、主だけから放出されました。さらに、物質界で作られるものはすべて2つの力、すなわち物質・精神の力の組みあわせによるものであり、その力も絶対真理者、人格主神、シュリー・クリシュナから放出されたものです。化学者は、研究所で水素と酸素を反応させて水を作りだすことができます。しかしじっさいは、その研究所で働いている生命体も、至高主の指揮下で動いています。そして、化学者があつかっている物質もやはり主が供給したものです。主はすべてを直接・間接に知っており、一切を事細かに認識し、そしてまったく独立した方です。主を金鉱山にたとえれば、宇宙創造界にいる無数の姿は金で作られた物体、たとえば金の指輪、ネックレスです。金の指輪やネックレスは金鉱山と質的に同じですが、量的にちがいます。ですから、絶対真理者は「同時に同じで、また同時にちがう」と言えます。なんであろうと絶対真理者と等しいものはありません、しかし同時に、絶対真理者から独立して存在しているものもありません。

全宇宙創造界を管理するブラフマーから小さな蟻にいたるまで、条件づけられている魂はいつもなにかを作っていますが、至高主から独立している者はだれもいません。物質主義者は、自分のほかに創造者はいない、と考え違いをしています。これがマーヤー (māyā) ・幻想です。乏しい知識ゆえに、そして不完全な感覚を超えたものを見ることができないために、「物体は、高度な知性という助けを介することなく偶然に作られた」と考えるのです。その考えは、このシュローカ (節) でシュリーラ・ヴァーサデーヴァによって否定されています——完全全体者、絶対真理者は一切万物の源だから、どのようなものでも絶対真理者の体から独立して存在することはなく、と。体の所有者は、体にながおこってもすぐにそれを感じます。同じように、創造界は絶対全体者の体です。だからこそ、絶対者は創造界内部でながおこっても直接・間接にすべてを把握しているのです。

『シュルティ・マントラ』では、絶対全体者、すなわちブラフマンは一切万物の究極の根源であると述べられています。すべては主から放出され、主によって維持され、最後に主の体のなかに入っていきます。それが自然の法則です。『スムリティ・マントラ』でも同じことが確認され、「ブラフマーの一生の始めにすべてが放出され、最終的にすべてが入っていくその原点は、絶対真理者あるいはブラフマンである」と述べられています。物質中心の科学者は、太陽が天体系の根源であると決めてかかっていますが、太陽の源については説明できません。しかしこの節ではその究極の根源について説明されています。ヴェーダ経典によると、太陽のような存在と比較できるブラフマーは究極の創造者ではありません。このシュローカで、「ブラフマーは人格主神からヴェーダ知識を伝授された」と述べられています。その反論として、「ブラフマーは最初に創造された生物であり、そのときにほかの生物はいなかったのだから、教えが伝授される可能性はない」と言う人がいるかもしれません。この節では、2番目の創造者・ブラフマーが創造力を行使できるように至高主が力を注いだ、とあります。つまり、すべての創造世界の背後には最高の知性があり、その知性の源が絶対真理者、シュリー・クリシュナだということです。『バガヴァッド・ギーター』で主シュリー・クリシュナは、「物質全体を構成するプラクリティ (prakṛti) ・創造エネルギーを統括するのはわたしだけである」と述べています。だからこそシュリー・ヴァーサデーヴァはブラフマーを崇拜するのではなく、ブラフマーを創造活動に導いている至高主を崇拜しています。このシュローカでは、特に *abhijñāḥ* (アビギヤハ) と *svarāṭ* (スヴァラートゥ) という言葉が重要な意味を持っています。この2つの単語は至高主と他の生命体の違いをしめしています。どのような生命体であろうと、*abhijñāḥ* でも *svarāṭ* でもありません。つまり、すべてを認識し、完全に独立している、という生命体はほかにいないということです。ブラフマーでさえ、創造するために至高主を瞑想しなくてはなりま

せんでした。ならば、アインシュタインのような大科学者といえども、すべてを認識し完全に独立していないのは当然です！ 人間がそのような科学者の頭脳を創りだしたわけではないことは論をまちません。科学者にも頭脳は創れないのですから、主の権威に反抗するような愚かな無神論者など言うまでもありません。主と一体になれると豪語するマーヤーヴァディー非人格論者でさえ、*abhijñah* にも *svarāt* にもなれません。非人格論者は、主と一体になれる知識を求めて厳しい苦行をしています。結局は自分たちの僧院や寺院の建築資金を出してくれる裕福な弟子を当てにしています。ラーヴァナやヒラニヤカシプのような無神論者も、難行苦行に耐えたあとに主の権威に逆らうことができました。しかしついには力尽き、無情な死という姿で現われた主から身を守ることはできなかったのです。これは、主の権威を冒瀆する現代の無神論者にも当てはまることです。かれらも同じ運命をたどることでしょう。歴史は繰り返されるのですから。主の権威を無視する人間は、自然とその法則によってかならず罰せられます。『バガヴァッド・ギーター』がそのことを *yadā yadā hi dharmasya glāniḥ* (ヤダー ヤダー ヒ ダハルマッシャ グラーニヒ) 「アルジュナよ。ダルマが衰退し、アダルマが台頭するとき、わたしはいつでも化身となって現われる」(『バガヴァッド・ギーター』 第4章・第7節) という有名な節で表現しています。

至高者があらゆる面で完璧な方であることはすべてのシュルティ・マントラが確証しています。シュルティ・マントラの1節では、「すべてにおいて完璧な主が物質界を一瞥した結果、全生物が創造された」と述べられています。どのような生物も主の部分体であり、主は精神的な火花であるかれらを広大な物質創造界のなかに受胎させ、その結果として創造エネルギーが機能しはじめ、数多くの壮麗な創造が展開されていきます。無神論者は、「神は時計技師ぐらいのことしかできない」などと主張するかもしれません。しかし、神は偉大です——雄と雌という一対の機械を製造できるのですから。そしていったん製造したあと、特になにかをするわけでもなく、多種多様な機械の雄と雌が同じ機能を持つ機械を無数に作りつづけます。自動的に同じ機械を作りだす一対の機械を作る人なら、神の知性に少しは近づけるかもしれません。もちろん、それは不可能です。作った人はそれぞれの機械を別々に維持しなくてはならないのですから。ゆえに、神と同じように創造できる人はだれもいません。神には *asamaurdhva* (アサマウルドゥヴァ) という別の名前があり、これは「神と同じか、あるいは凌ぐ者はいない」という意味です。*Param satyam* (パラム サチャム) ・至高の真理者とは、「自分と同等か、または自分を凌ぐ相手がほかにいない者」を指します。このことをシュルティ・マントラが、「物質宇宙が創造される以前、全生命体の主人である主だけが存在していた」確証しています。その主がブラフマーにヴェーダ知識をさずけました。その主こそ、私たちが全面的に従うべき方で

す。物質の束縛を絶ちきりたい人は主に身をゆだねなくてはなりません。『バガヴァッド・ギーター』もそのことを確証しています。

至高主の蓮華の御足に身をゆだねない人はかならず当惑します。『バガヴァッド・ギーター』が確証しているように、賢い人がクリシュナの蓮華の御足に服従し、クリシュナがすべての原因の原因であることを知ったときこそ、その人はマハートマー (mahātmā) ・偉大な魂になります。しかし、そのような偉大な魂はめったにいません。マハートマーだけが、至高主が全創造界の根源の原因であることを理解できます。主は parama (パラマ) ・究極の真理です。他のすべての真理が主に依存しているからです。主は全知です。主にとって幻想はまったく存在しません。

マヤーヴァデー派学者には、『シュリーマド・バーガヴァタム』はシュリー・ヴァーサデーヴァが編纂したものではない、と言う者がいます。あるいは、ヴォーパデーヴァという人物によって最近書かれたものである、と言う者もいます。シュリー・シュリーダラ・スヴァーミーはこのような無意味な主張にたいし、最古のプラーナには多くの箇所『シュリーマド・バーガヴァタム』について言及されている、と反論しています。『シュリーマド・バーガヴァタム』のこの最初のシュローカはガーヤत्री・マントラで始まっています。最古のプラーナである『マトウシャ・プラーナ』が『シュリーマド・バーガヴァタム』のガーヤत्री・マントラについて言及し、「ガーヤत्री・マントラで始まる精神的な教えに関する数多くの記述がある」と述べています。さらに、ヴリトウラスラの逸話も記載されています。満月の日にこの偉大な書物をだれかに贈呈することで、主神のもとに帰る最高完成を達成することができます。他のプラーナでも『シュリーマド・バーガヴァタム』の記述があり、「この書物は12編で完結し、18,000のシュローカが収められている」と述べられています。『パドマ・プラーナ』では、ガウタマとマハーラージャ・アンバリーシャの会話に『シュリーマド・バーガヴァタム』の名前が登場します。その場面では、アンバリーシャ王が、物質の束縛からの解放を望むのであれば『シュリーマド・バーガヴァタム』をくりかえし読むよう助言をさずかっています。このような記録があるのですから、『シュリーマド・バーガヴァタム』の信頼性に疑いをはさむ余地はありません。過去500年間、ジーヴァ・ゴースヴァーミー、サナータナ・ゴースヴァーミー、ヴィシュヴァナータ・チャクラヴァルティー、ヴァルラバーチャーリヤのような多くの学殖ゆたかな学者やアーチャーリヤたちが、そして主チャイタンニャ時代以降の多くの名高い学者たちが『シュリーマド・バーガヴァタム』について詳細な解説書を著わしています。真剣な求道者ならこの本を読むことを選び、超越的な教えの甘露を心ゆくまで味わうことでしょう。

シュリーラ・ヴィシュヴァナータ・チャクラヴァルティーは、根源かつ純粹で、俗な快樂とは無縁の性的心理 (*ādi-rasa*・アーディ・ラーサ) について特筆しています。物質界は性生活の原理にもとづいて動いています。現代文化はこの性生活にもとづいてすべてが動き、どこに目を向けても性生活の兆しを見ることができます。ですから、性生活は存在しないわけではありません。真の性生活は精神界にあります。物質的に見られる性生活は、精神界にある真相がゆがんで現われたものです。その真相が絶対真理者の内に存在するのですから、絶対真理者は非人格ではありえないということです。人格のないものが純粹な性生活を営むことはできません。つまり、非人格論哲学者は絶対真理者に人格がないことを強調しすぎているため、逆にけがらわしい俗な性生活をあおり立てていることになります。その結果、正しい精神的性生活について聞いたことのない人は、倒錯した物質的な性生活がすべてだと思いこむようになります。病的な物質的狀態での性生活と精神的な性生活は、まったく相反する営みなのです。

『シュリーマド・バーガヴァタム』は、まちがった先入観のない読者を徐々に超越的な完成境地へ導いてくれます。そして、結果にとらわれる活動、推論的な哲学、ヴェーダ經典がくりかえし述べている半神の崇拜など、物質界の三様式にまどわされた活動を超越する助けとなってくれることでしょう。

第2節

धर्मः प्रोज्झितकैतवोऽत्र परमो निर्मत्सराणां सतां
वेद्यं वास्तवमत्र वस्तु शिवदं तापत्रयोन्मूलनम् ।
श्रीमद्भागवते महामुनिकृते किं वा परैरीश्वरः
सद्यो हृद्यवरुध्यतेऽत्र कृतिभिः शुश्रूषुभिस्तत्क्षणात् ॥ २ ॥

ダハルマハ プロージジタ・カイトヴォー トウラ パラモー ニルマトウサラナーナム サターンム
dharmah projjhita-kaitavo 'tra paramo nirmatsarāṇām satām

ヴェーデヤム ヴァースタヴァナム アトウラ ヴァस्तウ シヴァダム ターパ・トウラヨーンムーラナンム
vedyam vāstavam atra vastu śivadam tāpa-trayonmūlanam

シュリーマドゥ・バーガヴァター マハー・ムニ・クリター キナム ヴァー パライル イーシュヴァラハ
śrīmad-bhāgavate mahā-muni-kṛte kiṁ vā parair īśvarah

サデヨー フリディ アヴァルデヤター トウラ クリティビヒヒ シュシュルーシュビヒス タトウ・クシャナートウ
sadyo hṛdyavarudhyate 'tra kṛtibhiḥ śuśrūṣubhis tat-kṣaṇāt

dharmah—宗教; *projjhita*—徹底的に排除して; *kaitavah*—成果を期待する動機に覆われて; *atra*—この中で; *paramah*—最高の; *nirmatsarāṇām*—心が 100% 純粹な人物の;

satām—献愛者達; vedyam—理解できる; vāstavam—事実の; atra—この中で; vastu—主題; śivadam—幸福; tāpa-traya—三重の苦しみ; unmūlanam—～を根絶させる; śrīmat—美しい; bhāgavate—『バーガヴァタ・プラーナ』; mahā-muni—偉大な聖者(ヴァーサデーヴァ); kṛte—編纂した; kim—何が; vā—必要性; paraih—そのほか; īśvaraḥ—至高主; sadyah—すぐに; hr̥di—心の中; avarudhyate—密になる; atra—この中; kṛtibhiḥ—敬虔な人々によって; śuśrūṣubhiḥ—教養によって; tat-kṣaṇāt—遅れることなく。

物質的な動機にもとづく宗教をすべて徹底的に排除したこの『バーガヴァタ・プラーナ』は、純真な心を持つ献愛者だけが理解できる最高の真理を説いている。最高の真理とは幻想ではない真実であり、その真実が万民を幸福に導き、三重の苦しみを根絶する。偉大な聖者ヴァーサデーヴァが(円熟期に)編纂したこの美しき『シュリーマド・バーガヴァタム』は、神を悟るための知識をすべて網羅している。では、ほかの経典など必要であろうか? 『シュリーマド・バーガヴァタム』の言葉を細心の注意をはらって、そして素直な心で聞く者は、この知識をつちかうことによって至高主を心に固定させることができる。

要旨解説

宗教には4つの主題——敬虔なおこない、経済発展、感覚の満足、そして最終的に物質的な束縛からの解放——が含まれています。無宗教の生活は動物の心理状態と変わりません。まさに、人間生活は宗教とともに始まります。食べること、眠ること、恐れること、生殖行為を営むことは、動物生活に見られる4つの原則であり、それは動物と人間に共通しています。しかし、宗教は人間特有の機能です。宗教のない人間生活は動物の生活にほかなりません。だからこそ、人間社会には自己を悟るための、そして個人と神との永遠な絆にかかわるなんらかの宗教が見られるのです。

下等な人間社会では、物質自然界を支配しようとする攻防がつねにくりひろげられています。言い換えれば、感覚を満たすための競争がたえず行なわれているということです。そのような意識に駆りたてられるときに人は宗教をはじめ、物質的なものを得るために敬虔なことをしたり、信心深いことをしたりします。しかしそのような利益が別の方法で手に入るとわかると、宗教は見捨てられます。現代文化はこのような状態にあります。経済的に豊かになっているため、だれも宗教に興味をしめしません。教会、回教寺院、寺院にはほとんどだれもいません。興味があるのは祖先が築いた宗教的な場所ではなく、工場、店舗、映画館です。宗教は金儲けのため、という事実を如実にしめしています。儲けた利益は感覚満足に使われます。やがて快

適な生活を求めても満たされなければ、次は解放を求め、至高主と一体になろうとします。つまり、どちらにしても感覚を満たそうとする意識であることに変わりはないということです。

感覚満足に対する過度の競争が起こらないよう、ヴェーダは先に挙げた4つの行動を規則だてています。しかし、『シュリーマド・バーガヴァタム』はこのような感覚満足を超越した文献です。けがれのない超越的な文献であり、感覚を満たすための競争にはかかわらない純粋な献愛者だけが理解できます。物質界には、動物・人間・社会・国家のあいだで食うか食われるかの競争が見られます。しかし、献愛者はそのような攻防を超越しています。永遠で幸福な生活ができる神の世界に帰ろうとしているかれらは、物質主義者と競うことはしないのです。そのような超越主義者は他人をねたまず、清らかな心を持っています。物質界では、だれもがだれをもねたんでいますから争いがおこります。しかし主の超越的な献愛者には嫉妬心がないどころか、万民の幸せを願い、神を中心とした競争のない社会をめざして尽力しています。社会主義者は競争のない社会を掲げていますが、それは不自然です。だれが独裁者になるか互いに張り合っているのですから。ヴェーダの見解からすると、あるいは一般人の行動から見ても、感覚を満たすのは物質生活の基本です。ヴェーダは3つの道をしめしています。優れた惑星に高められるための果報的活動、半神の惑星に高められるための半神崇拜、そして絶対真理とその非人格性を悟って一体化しようとする道です。

絶対真理の姿のない様相は究極の悟りではありません。非人格性の上にはパラマートマー (Paramātmā) の様相が、そしてその上には絶対真理の人格としての様相、すなわちバガヴァーン (Bhagavān) の悟りがあります。『シュリーマド・バーガヴァタム』は、絶対真理の人格としての様相について情報を提供します。それは、非人格論者の文献よりも高度で、ヴェーダのギャーナ・カーンダ (jñāna-kāṇḍa) の分野よりも高度な境地です。さらにカルマ・カーンダ (karma-kāṇḍa) を越え、また最高人格主神・主シュリー・クリシュナの礼拝を勧めているため、ウパーサナー・カーンダ (upāsana-kāṇḍa) をも超えた悟りの境地です。カルマ・カーンダでは、より高い感覚満足を求めて天国の惑星に行くための競争があり、ギャーナ・カーンダとウパーサナー・カーンダでも同じような競争があります。『シュリーマド・バーガヴァタム』は、発生源、すなわち発生体の根源である最高真理に焦点をあてているため、上記の分野よりも優れています。発生源は絶対真理者・至高主であり、すべての放出物はエネルギー源に関連した姿です。

発生源から独立しているものはなにもありませんが、同時に、すべてのエネルギーは発生源と分離しています。この考えに矛盾点はありません。『シュリーマド・バーガヴァタム』 (第1

編・第1章・第1節)は、*janmādy asya* (ジャンマーディ アッシャ) のスートラから始まる『ヴェーダンタ・スートラ』にあるこの「同時に同じで異なる」という哲学を明確に説いています。

「主のエネルギーは、主と同じでもあり、同時に異なってもいる」という知識は、エネルギーを絶対者と捉える推論者への答です。この知識を正しく理解した人は、一元論と二元論の考えが不完全であることに気づきます。「同じでもあり、同時に異なってもいる」という考えにもとづいた超越的な意識を高めることで、三重の苦しみを超えた境地に即座に導かれます。三重の苦しみとは、(1)心と体から生じる痛み、(2)ほかの生物から負わされる痛み、(3)人間には制御できない自然災害による痛みを指します。『シュリーマド・バーガヴァタム』の教えは、献愛者が絶対者に服従することから始まります。献愛者は、自分が絶対真理者と一体であること、また同時に絶対者の永遠な召し使いであるという立場をよく知っています。物質的な概念に囚われている人は、「私こそが、自分の目に見える物すべての主人である」と誤解しており、そのために三重の苦しみに悩まされています。しかし、自分は超越的な召し使いである、と悟った人は、すべての痛みからすぐに解放されます。物質自然界をわがものにしようと考えていれば、至高者の召し使いにはなれません。主への奉仕は、精神的な正体という純粋な意識でなされるものです。その奉仕によって、私たちは物質的な障害をすぐに乗り越えることができます。

また『シュリーマド・バーガヴァタム』は、シュリー・ヴァーサデーヴァが自ら『ヴェーダンタ・スートラ』について解説したものです。ナーラダの慈悲をさずかり、精神生活の円熟期において書きあげました。シュリー・ヴァーサデーヴァはナーラーヤナ、人格主神の真の化身です。ですから、ヴァーサデーヴァの権威に疑いの余地はありません。他のヴェーダ經典すべての著者でもありますが、『シュリーマド・バーガヴァタム』を最優先にして学ぶよう勧めています。他のプラナーナでは、半神を崇拝するためのさまざまな方法が記載されていますが、『シュリーマド・バーガヴァタム』では至高主の崇拝だけをとりあげています。至高主を体全体とすれば、半神はその体のさまざまな部分です。ですから、至高主を崇拝さえすれば半神を崇拝する必要はありません。至高主は献愛者の心にすぐに、しっかりと固定されます。主チャイタンニヤ・マハープラブは『シュリーマド・バーガヴァタム』を非の打ちどころのないプラナーナとして読者に勧め、他のプラナーナとの違いを明確にしています。

この超越的な教えをさずかる正しい方法は、すなおな気持ちで聞く心構えです。挑戦的な態度は、この崇高な教えを理解する助けにはなりません。この節では、ある言葉が適切な導きを表現するために使われています。それが *śuśrūṣu* (シュシュルーシュ) です。超越的な教えを聞く熱意がなによりも大切です。真剣に聞こうとする望みが第一の資格なのです。

不運な人は『シュリーマド・バーガヴァタム』を聞くことに関心をしめしません。方法はか
んたんでも、実際に遂行するのはむずかしいのです。そのような人は、世間話や政治の話には
いくらでも時間をついやしますが、『シュリーマド・バーガヴァタム』を聞く集まりに誘われ
ると、いやがります。『シュリーマド・バーガヴァタム』の吟唱を職業にしている者たちは、
至高主の娯楽に関連する秘奥な話題を性的描写と考えているふしがあるため、その部分を先に
読もうとします。この書物は最初から聞くべきものです。この書物を理解できる資格のある人
をこのシュローカがしめしています——多くの敬虔なおこないを経たあとに、『シュリーマド・
バーガヴァタム』を聞く資格を得る——と。賢い人は思慮深い判断をするからこそ、『シュリ
ーマド・バーガヴァタム』を読んで直接に最高人格者を悟ることができる、と偉大な聖者ヴァ
ーサデーヴァが保証しています。この教えを受けいれる気持ちになりさえすれば、ヴェーダが
説くさまざまな悟りの段階をたどることなく、すぐにパラマハンサの境地に高められます。

第3節

निगमकल्पतरुर्गलितं फलं
शुकमुखादमृतद्रवसंयुतम् ।
पिबत भागवतं रसमालयं
मुहुरहो रसिका भुवि भावुकाः ॥ ३ ॥

ニガマ・カルパ・タロール ガリタンム パランム
nigama-kalpa-taror galitam phalam

シュカ・ムカハードウ アムリタ・ドウラヴァ・サンムユタンム
śuka-mukhād amṛta-drava-samyutam

ピバタ バハーガヴァタン ラサンム アーラヤンム
pibata bhāgavatam rasam ālayam

ムフル アホー ラシカー プフヴィ バハーヴァカーハ
muhur aho rasikā bhuvī bhāvukāḥ

nigama—ヴェーダ経典; kalpa-taroh—望みの木; galitam—完全に熟して; phalam—だも
の; śuka—『シュリーマド・バーガヴァタム』を最初に語ったシュリーラ・シュカデーヴァ・
ゴースヴァーミー; mukhāt —～の唇から; amṛta—甘露; drava—適度に硬く、そして柔らか
いためたやすく飲みこむことができる; samyutam—あらゆる面で完璧である; pibata—それ
を味わえ; bhāgavatam—主との永遠な絆の科学について述べた書物; rasam—(美味な) 果汁;
ālayam—解放するまで、あるいはすでに解放した状態でも; muhuh—常に; aho—おお;

rasikāḥ—甘露な味覚にかかわる知識を知りつくした人々; bhuvi—地上で; bhāvukāḥ—熟達し、思慮深い人物。

熟達し、思慮深き方たちよ。ヴェーダ経典という望みの木の熟した果実である『シュリーマド・バーガヴァタム』を味わっていただきたい。この文献はシュリー・シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーの唇からほとぼしりでた。ゆえにその果実の甘露は、解放された魂を含むすべての人々にとってすでに味わい深いものなのに、その甘さをさらに増したのである。

要旨解説

先の2つのシュローカで、『シュリーマド・バーガヴァタム』は超越的な質をそなえているために、他のヴェーダ経典すべてをしのぐ崇高な書物であることが明確に証明されています。俗な活動や知識をすべて超えた書物なのです。このシュローカでは、『シュリーマド・バーガヴァタム』が優れた書物であることはもとより、すべてのヴェーダ経典の熟した果実であると述べられています。言い換えれば、すべてのヴェーダ知識の真髄だということです。これらを考慮したうえで、忍耐強く、そしてすなおな心で聞く態度を心がけなくてはなりません。深い敬意と細心の注意を払い、『シュリーマド・バーガヴァタム』が授けるメッセージと教訓を受けとめる必要があるのです。

ヴェーダは人類が知りえるすべての知識を網羅していることから、「望みの木」にたとえられます。精神的な悟りはもとより、一般生活に必要な物事をも含んでいます。ヴェーダには、社会・政治・宗教・経済・軍事・医学・化学・物理学・形而上学、さらには体と魂を維持するために必要な一切の知識に関する規定原則などが含まれていますが、これらをすべて超えた知識として、精神的な悟りのための特別な導きも記載されています。その規則だてられた知識には、生命体が徐々に精神的状態に高められる教えが含まれており、その頂点は、「人格主神がすべての精神的な甘露・ラサの源である」という知識です。

物質界の最初の生物であるブラフマーから小さな蟻にいたるまで、どのような生物も、感覚をとおして得られる満足を味わいたいと思っています。感覚の喜びを専門用語では *rasa* (ラサ) といい、さまざまな種類に分けられます。啓示経典には次の12種類のラサが挙げられています。(1) *raudra* (ラウドウラ・怒り)、(2) *adbhuta* (アドウブタ・驚き)、(3) *śṛṅgāra* (シュリンガーラ・夫婦愛)、(4) *hāsyā* (ハーッシャ・滑稽さ)、(5) *vīra* (ヴィーラ・武士道精神)、(6) *dayā* (ダヤー・慈悲心)、(7) *dāsyā* (ダーッシャ・奉仕者精神)、(8) *sakhya* (サキヤ・同胞愛)、(9) *bhayānaka* (バヤーナカ・恐怖)、(10) *bibhatsa* (ビーバトウサ・衝撃)、(11) *śānta* (シャーンタ・中立心)、(12) *vātsalya* (ヴァートウサリヤ・親としての感情)。

これらのラサを総合した感情が、愛着あるいは愛情と呼ばれます。最初、そのような愛情は敬愛、奉仕、友情、親の愛情、そして恋愛という形で表わされます。この5種類の兆しがないときの愛情は、怒り、驚き、滑稽さ、武士道、恐れ、衝撃などとして間接的に現われます。たとえば、男性が女性に好意を寄せている状態のラサは恋愛と呼ばれます。しかしそのような愛情関係に不和が生じると、驚き、怒り、衝撃、さらには恐怖が現われたりします。ときには、二人の愛情関係が陰惨な殺人事件にまで発展することがあります。ラサは人間と人間の、あるいは動物と動物のあいだに見られるものです。物質界では、人間と動物、あるいは人間とほかの生物のあいだでラサが交わされることはありません。同じ種類の生物で交わされるものです。しかし精神魂は至高主と同じ質をそなえています。ですからラサはもともと、精神的な生命体と精神的な全体者・最高人格主神とのあいだで交わされるもので、精神的な愛情の交換・ラサは、生命体と至高主のあいだで精神的な状況で完全に表わされるものです。

ですから最高人格主神は、ヴェーダの賛歌であるシュルティ・マントラで、「すべてのラサの源である」と述べられています。至高主と交流しながら自分本来の主とのラサを交わすときに、私たちはほんとうに幸せになれます。

シュルティ・マントラは、「すべての生命体は、特定のラサに恵まれた自分本来の立場を持ち、そのラサをとおして人格主神とふれあう」と述べています。解放された境地だけにおいて、魂が持つ本来のラサを十分に体験することができます。物質界ではラサがゆがんだ形で、しかも一時的に体験されます。そのため、物質界でのラサは *raudra* (ラウドウラ・怒り) などの物質的な形となって表わされます。

ですから、活動の基本原則であるさまざまなラサを知りつくした人は、物質界で見られるラサは本来のラサが屈折して現われていることを理解できます。博識な学者は精神的な形でほんとうのラサを味わおうとしますが、最初は至高者と一体になることを望みます。そのため知性の乏しい超越主義者は、さまざまなラサがあることを知らないために、精神的全体者と一体になることしか考えられません。

このシュローカでは、解放された境地でも味わえる精神的なラサは、すべてのヴェーダ知識の熟した果実である『シュリーマド・バーガヴァタム』という文献で味わえる、と明記されています。この超越的な文献の言葉をすなおな気持ちで聞く人は、心から望んでいる喜びを完全に味わうことができます。しかし、正しい情報源から聞くことも忘れてはなりません。『シュリーマド・バーガヴァタム』は正しい源から正確に得られるものです。それは、精神界からナーラダ・ムニによって弟子のシュリー・ヴァーサデーヴァにもたらされました。ヴァーサデーヴァはそれを息子のシュリーラ・シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーに伝え、シュリーラ・シ

ユカデーヴァ・ゴースヴァーミーは、7日後に死ぬことになっていたマハーラージャ・パリークシットに伝えました。シュリーラ・シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーは誕生の瞬間から解放されていた魂です。母親の胎内にいるときから解放の境地にあった人物で、誕生したあとも、精神的な訓練を受けたわけではありません。ふつうの魂は、誕生したばかりのときは一般的・精神的いずれの面でも資格をそなえていません。しかしシュリーラ・シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーは完璧に解放された人物であったため、精神的な悟りを高めるための方法を実践する必要はありませんでした。それでも、物質の三様式を超越した状態で完全に自由な人物であったにもかかわらず、ヴェーダ讃歌を唱える解放した魂によって崇拜される最高人格主神の超越的なラサに魅かれたのでした。至高者の崇高な娯楽は、一般人よりも解放された魂にとって魅力的なのです。超越的なラサは人と人が交わすものですから、主に人格がないはずがありません。

『シュリーマド・バーガヴァタム』には主の超越的な娯楽が描写されており、その内容はシュリーラ・シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーが順序だてて説明しています。ですから、解放を求めている人や最高全体者と一体になろうとしている人を含むあらゆる段階の人々が魅かれる内容になっています。

鳥のオウムをサンスクリット語で *suka* (シュカ) といいます。熟した果実がこのような鳥の赤いくちばしでつつかれると、その甘味はさらに強くなります。知識の完成・究極であるヴェーダの果実が、オウムにたとえられるシュリーラ・シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーによって語られました。博識な父親から聞いた『シュリーマド・バーガヴァタム』を寸分の違いもなく復誦できる能力からではなく、だれをも魅了する話術に長けているからその名前で呼ばれるのです。

『シュリーマド・バーガヴァタム』の主題は、誠実な心で聞く人が物質界の倒錯された味わいとは違う超越的な甘露をすぐに味わえるように、シュリーラ・シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーによってしめされました。その熟した果実は、クリシュナローカという頂点の惑星から突然落ちてきたわけではありません。師弟継承をとおし、変えられることも妨げられることもなく、注意深く伝えられたのです。超越的な師弟継承にはまったく関係のない愚かな人々が、崇高な悟りの段階に応じて注意深くこの果実を人々に与えているシュカデーヴァ・ゴースヴァーミーの足跡に従わずに、ラーサ・ダンスという頂点の超越的なラサを知ろうとする大きなまちがいをおかしています。私たちは、主題を入念に提しめしているシュカデーヴァ・ゴースヴァーミーのような人物たちの存在を念頭におき、『シュリーマド・バーガヴァタム』がどのような文献であるかを知る知性を持たなくてはなりません。バーガヴァタ派にある師弟継承とい

う手段は、将来においても『シュリーマド・バーガヴァタム』はシュリーラ・シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーの代表者である人物をとおして理解しなくてはならないことをしめしています。この偉大な書物の吟唱を不当に職業としている者は、もちろんシュカデーヴァ・ゴースヴァーミーの代表者ではありません。吟唱の目的が生計をたてることにあるからです。ですから、職業吟唱家の法話は避けなくてはなりません。かれらのほとんどはこの崇高な主題を理解する段階的なステップを踏まずに、もっとも秘奥な部分から話をはじめます。いきなりラーサ・ダンスから話をはじめ、それを愚かな人たちが誤解して受けいれます。そのような行為を不道德だと考える人もいますが、ばかげた説明をしてごまかそうとする者もいます。いずれにしても、かれらはシュリーラ・シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーの足跡に従うつもりは最初からありません。

シュリーラ・シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーは『シュリーマド・バーガヴァタム』を最初から説明しており、超越的科学のことを知らない俗人の気まぐれを満足させるような人物ではありません。ですから、ラサを真剣に学ぼうとする生徒は、シュリーラ・シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーからの師弟継承をとおして、『シュリーマド・バーガヴァタム』の教えを受けとらなくてはなりません。この超越的な文献は細心の注意をはらってまとめられていますから、誠実で真剣な人は、シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーやその正しい代表者の口からあふれでる甘露を飲むことで、ヴェーダ知識の熟しきった果実をすぐに満喫することができるのです。

第4節

नैमिषेऽनिमिषक्षेत्रे ऋषयः शौनकादयः ।

सत्रं स्वर्गायलोकाय सहस्रसममासत ॥ ४ ॥

ナイミシェー ニミシャ・クシェートウレー
naimiṣe 'nimiṣa-kṣetre

リシャヤハ シャウナカーダヤハ
ṛṣayaḥ śaunakādayaḥ

サトウラム スヴァルガーヤ ローカーヤ
satraṁ svargāya lokāya

サハスラ・サマンム アーサタ
sahasra-samam āsata

naimiṣe—ナイミシャーラニヤという名の森で; animiṣa-kṣetre—(まぶたを閉じない) ヴィシュヌが特に好む場所; ṛṣayaḥ—聖者達; śaunaka-ādayaḥ—聖者シャウナカを筆頭に;

satram—儀式; *svargāya*—天国で讃えられている主; *lokāya*—そして、いつも主と交流している献愛者のために; *sahasra*—1,000; *samam*—年; *āsata*—行なわれた。

昔、ナイミシャーラニヤの森の聖地で、主と主の献愛者を満足させる盛大な 1,000 年の儀式を執行するために、シャウナカを筆頭とする偉大な聖者たちが集まった。

要旨解説

『シュリーマド・バーガヴァタム』のプロローグが先の 3 つのシュローカで語られました。これから、この偉大な書物の本編が始まろうとしています。『シュリーマド・バーガヴァタム』は、シュリーラ・シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーによって最初に語られたあと、ナイミシャーラニヤでふたたび語られました。

『ヴァーヤヴィーヤ・タントラ』で、「この宇宙の技師・ブラフマーは、宇宙を囲む巨大な輪を思い描いた」と述べられています。その巨大な輪の中心点がナイミシャーラニヤに固定されたのです。同じように、ナイミシャーラニヤの森については『ヴァラーハ・プラーナ』でも言及されており、この場所で儀式を執行することで邪悪な質を持つ人間たちの力が弱められる、と述べられています。このような理由で、ブラーフマナは儀式をナイミシャーラニヤですることを好みます。

主ヴィシュヌの献愛者は、主を満足させるためにあらゆる種類の儀式を執行します。献愛者はいつでも主への奉仕に執着していますが、墮落した魂は物質的な生活から得られる喜びに執着しています。『バガヴァッド・ギーター』では、主ヴィシュヌの喜び以外のために物質界でなされたことは行為者をさらに束縛する要因になる、と言われていています。ですから、どのような活動でも、主ヴィシュヌと献愛者の満足ための犠牲としておこなうよう命じられています。その教えに従うことで、万民に平和と繁栄をもたらすことができます。

偉大な聖者は、大衆の幸福のために働くことをいつも考えており、シャウナカや他の聖者たちも、盛大な儀式を長期間執行するために聖地ナイミシャーラニヤに集まりました。精神生活を忘れた人々は平和と繁栄にたどり着く正しい道を知りません。しかし聖者たちは知っています。だからこそ万民の幸を願い、世界に平和をもたらすことをいつも考えているのです。かれらは全生物にとって誠実な友であり、自らの辛苦などかえりみることなく、人々の幸福のために主への奉仕に励んでいます。主ヴィシュヌを巨大な木にたとえれば、半神、人間、シッダ、チャーラナ、ヴィデャーダラなどを含む全生物は、枝、小枝、葉です。木の根に水をそそげばその各部分も自動的に栄養を受けとりますが、木から切りはなされた枝や葉は栄養を受けとることはできません。どれほど水をかけてもやがては枯れていくばかりです。この枝や葉のよう

に、人格主神から離れてしまった人類は水を受けとることはできません。それでも水を与えつづけるのは、エネルギーや資源を無駄にしているにすぎません。

現代の物中心の社会は至高主から切り離されています。そのような状態で無神論の指導者たちが計画を練って実行しても、ことごとく挫折するばかりです。それでも、かれらは自分たちの置かれている状態に目覚めようとしません。

現代では、主の聖なる名前を集まって唱えることが自己を悟る方法として用意されています。この方法は、主シュリー・チャイタンニャ・マハープラブによってもっとも科学的にしめされ、知性ある人なら真の平和と繁栄をつかむために主の教えを活かすはずです。『シュリーマド・バーガヴァタム』も同じ目的で編纂され、このことは後の節でさらに具体的に説明されていきます。

第5節

त एकदा तु मुनयः प्रातर्हुतहुताग्नयः ।
सत्कृतं सूतमासीनं पप्रच्छुरिदमादरात् ॥ ५ ॥

タ エーカダー トウ ムナヤハ
ta ekadā tu munayaḥ

プラータル フタ・フターグナヤハ
prātar huta-hutāgnayaḥ

サトゥ・クリタンム スータンム アーシーナンム
sat-kṛtaṁ sūtam āsīnaṁ

パプラツチュル イダンム アーダラートウ
papracchur idam ādarāt

te—聖者達; *ekadā*—ある日; *tu*—しかし; *munayaḥ*—聖者達; *prātaḥ*—朝; *huta*—燃やしている; *huta-agnayaḥ*—儀式の火; *sat-kṛtaṁ*—ささげるべき敬意; *sūtam*—シュリー・スータ・ゴースヴァーミー; *āsīnaṁ*—座って; *papracchuh*—尋ねる; *idam*—このことについて(以下のように); *ādarāt*—十分な敬意をはらって。

ある日の朝、聖者たちは儀式の火を燃やして朝の奉仕を終えたあと、シュリーラ・スータ・ゴースヴァーミーに敬意をこめて上座を用意したあと、丁重に次のような質問をした。

要旨解説

朝は、精神的な奉仕に最適な時間帯です。偉大な聖者たちは、『シュリーマド・バーガヴァタム』の語り手に、ヴァーサーサナ (vyāsāsana) 「シュリー・ヴァーサデーヴァの座」という敬意を込めた貴賓席をささげました。シュリー・ヴァーサデーヴァは全人類にとって根源の精神的教師であり、他の教師はその代表者とされています。代表者とは、シュリー・ヴァーサデーヴァの見解を正確に説明できる人物のことです。シュリー・ヴァーサデーヴァは『シュリーマド・バーガヴァタム』の教えをシュリーラ・シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーにさづけ、シュリー・スータ・ゴースヴァーミーはシュリー・シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーからさづかりました。師弟継承上にいるシュリー・ヴァーサデーヴァの正しい代表者はだれでもゴースヴァーミーです。かれらはすべての感覚を抑制し、先代のアーチャーリヤたちがしめたた道だけを歩みます。ゴースヴァーミーは感情のおもむくままに『シュリーマド・バーガヴァタム』の法話をするものではありません。途切れることなく精神的メッセージを伝えてくれた先代の教師たちに従いつつ、細心の注意をはらいながら自らの奉仕を実践しているのです。

『シュリーマド・バーガヴァタム』を傾聴する人々は、意味を正しく理解するために質問することはできますが、それが挑戦的な態度であってはなりません。語り手と主題に対して深い敬意をもって質問すべきです。それが『バガヴァッド・ギーター』でも勧められている方法です。正しい情報源からすなおな気持ちで傾聴し、超越的な話題を学ばなくてはなりません。だからこそ、聖者たちは語り手であるスータ・ゴースヴァーミーに深い敬意を表わしたのです。

第6節

ऋषय ऊचुः

त्वया खलु पुराणानि सेतिहासानि चानघ ।
आख्यातान्यप्यधीतानि धर्मशास्त्राणि यान्युत ॥ ६ ॥

リシャヤ ウーチュフ
ṛṣaya ūcuḥ

トゥヴァヤー カハル プラーナーニ
tvayā khalu purāṇāni

セーティハーサーニ チャーナガハ
setihāsāni cānagha

アーキヤーナーニ アピ アデヒーターニ
ākhyātāny apy adhītāni

ダハルマ ・シャーストウラーニ ヤーニ ウタ
dharma-sāstrāṇi yāny uta

ṛṣayaḥ—聖者達; *ūcuḥ*—言った; *tvayā*—あなた様によって; *khalu*—疑いようもなく; *purāṇāni*—実例の説明を加えたヴェーダの補足; *sa-itihāsāni*—歴史とともに; *ca*—そして; *anagha*—一切の悪のない; *ākhyātāni*—説明した; *api*—～ではあるが; *adhītāni* —正しく読んだ; *dharma-sāstrāṇi*—向上的生活のための正しい指示をしめす経典; *yāni* —これらすべて; *uta*—言った。

聖者たちが言う。「尊いスータ・ゴースヴァーミー様。あなた様は悪と一切かかわりのないお方です。宗教生活のための名高いすべての経典、各プラーナ、そして歴史について正しい指導のもとで学ばれ、また説明されているからこそ、その意味を熟知しておられます。」

要旨解説

ゴースヴァーミー、すなわちシュリー・ヴァーサデーヴァの正しい代表者は、どのような悪ともかかわりがあってはなりません。カリ・ユガの4つのおもな悪として、(1)女性との不義な関係、(2)動物の屠殺、(3)陶酔、(4)憶測に頼る一切の賭博、があります。ゴースヴァーミーがヴァーサーサナに座するには、これらの悪と一切関係を断ちきらなくてはなりません。人格が清廉潔白ではなく、このような悪にかかわっているような人は、ヴァーサーサナに座することは許されません。悪と無縁であることはもちろん、すべての啓示経典やヴェーダにも精通していません。各プラーナもヴェーダの一部です。また、『マハーバーラタ』や『ラーマヤナ』といった歴史書もヴェーダの一部です。アーチャーリヤやゴースヴァーミーはこのような文典に精通していません。それらを聞き、説明することは、ただ読むことよりも大切です。啓示経典の知識は、聞いて説明してこそ会得できるものです。聞くことを *śravaṇa* (シュラヴァナ) といい、説明することを *kīrtana* (キールタナ) といいます。このシュラヴァナとキールタナは、精神生活を高めてくれるもっとも重要な方法です。正しい情報源からすなおな心で聞いて崇高な知識を会得した人物だけが、要旨を正しく説明することができます。

第7節

यानि वेदविदां श्रेष्ठे भगवान् बादरायणः ।
अन्ये च मुनयः सूत परावरविदो विदुः ॥ ७ ॥

ヤーニ ヴェーダ・ヴィダーンム シュレーシュトホー
yāni veda-vidāṁ śreṣṭho

バハガヴァーン バーダラーヤナハ
bhagavān bādarāyaṇaḥ

アニュー チャ ムナヤハ スータ
anye ca munayaḥ sūta

パラヴァラ・ヴィドー ヴイドウフ
parāvara-vido viduḥ

yāni—それらすべて; *veda-vidāṁ*—ヴェーダの学者; *śreṣṭhaḥ*—最年長者; *bhagavān*—主神の化身; *bādarāyaṇaḥ*—ヴァーサデーヴァ; *anye*—他の; *ca*—そして; *munayaḥ*—聖者達; *sūta*—おお、スータ・ゴースヴァーミー; *parāvara-vidaḥ*—博識な学者の中で、形而下学および形而上学の知識に精通している人物; *viduḥ*—知っている人物。

「おお、スータ・ゴースヴァーミー。あなた様は最年長のヴェーダーンタ学者ですから、主神の化身であるヴァーサデーヴァの知識に精通し、またあらゆる形而下学と形而上学の知識を把握している他の聖者たちをもご存知です」

要旨解説

『シュリーマド・バーガヴァタム』は、『ブラフマ・スートラ』、すなわち『バーダラーヤニ・ヴェーダント・スートラ』に関する最適な解説書です。最適といわれる理由は、ヴァーサデーヴァ自身が『ヴェーダント・スートラ』、あるいはすべてのヴェーダ經典の真髓である『シュリーマド・バーガヴァタム』の著者だからです。ヴァーサデーヴァのほかにも、ゴウタマ、カナダ、カピラ、パタンジャリ、ジャイミニ、アシュターヴァクラという6種類の哲学体系の著者である聖者たちがいます。有神論については『ヴェーダント・スートラ』に完璧に説明されていますが、他の哲学的推論は、すべての原因の究極原因についてほとんど触れていません。ヴァーサーサナに座れるのはすべての哲学体系を会得したあとだけであり、その資格があつてこそ、他の体系をすべて一蹴して『バーガヴァタム』の有神論的見解を完璧にしめすことができるのです。シュリーラ・スータ・ゴースヴァーミーは正当な教師であり、だからこそナイミシャーラニヤの聖者たちはスータ・ゴースヴァーミーにヴァーサーサナという上座をささげました。シュリーラ・ヴァーサデーヴァは力をさずかった化身として正式に認められているため、この節で人格主神と呼ばれています。

第8節

वेत्थ त्वं सौम्य तत्सर्वं तत्त्वतस्तदनुग्रहात् ।
ब्रूयुः स्निग्धस्य शिष्यस्य गुरवो गुह्यमप्युत ॥ ८ ॥

ヴェーツタハ トウヴァンム サウミヤ タトウ サルヴァンム
vettha tvam saumya tat sarvam

タットウヴァタス タドウ・アヌグラハートウ
tattvatas tad-anugrahāt

ブルーユフ スニグダハッシャ シッシャッシャ
brūyuh snigdhasya śiṣyasya

グラヴォー グヒヤンム アピ ウタ
guravo guhyam apy uta

vettha—あなたは精通している; *tvam*—あなた; *saumya*—純粋で誠実な人物; *tat*—それら; *sarvam*—すべて; *tattvataḥ*—実際; *tat*—彼らの; *anugrahāt*—～の好意によって; *brūyuh*—語るだろう; *snigdhasya*—従順な人物の; *śiṣyasya*—弟子の; *guravaḥ*—師達; *guhyam*—秘奥な; *apy uta*—～に恵まれている。

「またあなた様は従順な心を持つお方ですから、精神指導者たちは心穏やかな弟子であるあなた様にあらゆる恩寵をさずけました。ですから、師たちから学んだ知識をすべて私たちに科学的に説くことができます」

要旨解説

精神生活を成功させる秘訣は、精神指導者を満足させ、そのことで誠実な祝福をさずかることにあります。シュリーラ・ヴィシュヴァナータ・チャクラヴァルティー・タークラは、精神指導者への8つの祈りの節で次のように謳っています。「私は精神指導者の蓮華の御足に尊敬の礼をささげます。師を満足させるだけで人格主神を喜ばせることができます。しかし、師の不満をかうようなことがあれば、精神的な悟りの道に大きな混乱が生じるばかりです」。ですから、弟子は正しい精神指導者に対してひじょうに従順でなくてはなりません。シュリー・スータ・ゴースヴァーミーはこの弟子の資格をすべて満たしていましたから、シュリーラ・ヴァーサデーヴァや他の博學で自己を悟った精神指導者たちからあらゆる恩寵をさずかりました。

ナイミシャーラニヤの聖者たちは、シュリーラ・スータ・ゴースヴァーミーが真正な人物であることを確信していました。だからこそ、話を聞きたいと切望していたのです。

第9節

तत्र तत्राञ्जसायुष्मन् भवता यद्विनिश्चितम् ।
पुंसामेकान्ततः श्रेयस्तत्रः शंसितुमर्हसि ॥ ९ ॥

タトウラ タトウラーンジャサーユシュマン
tatra tatrāñjasāyuṣman

バハヴァター ヤドゥ ヴィニシュチタンム
bhavatā yad viniścitam

プンムサーンム エーカーンタタハ シュレーヤス
puṁsām ekāntataḥ śreyas

タン ナハ シヤンムシトウンム アルハシ
tan naḥ śamsitum arhasi

tatra—それについて; *tatra*—それについて; *añjasā*—かんたんにする; *āyuṣman*—長寿に恵まれて; *bhavatā*—あなたによって; *yad*—なんであろうと; *viniścitam*—確信した; *puṁsām*—一般の人々のために; *ekāntataḥ*—絶対に; *śreyaḥ*—究極の善; *tat*—それ; *naḥ*—私達に; *śamsitum*—説明すること; *arhasi*—ふさわしい。

「ですから、どうか、長寿に恵まれたあなた様ですから、絶対に真理であると確信されたことを、そして一般大衆にとって究極の善であると確信されたことを、かんたんに理解できる形で私たちにご説明ください」

要旨解説

『バガヴァッド・ギーター』ではアーチャーリヤの崇拝が勧められています。アーチャーリヤとゴースヴァーミーは、大衆の幸福を、特にかれらの精神生活の幸福をいつも心から願っています。精神的な幸福を得れば、おのずから物質的な幸福も得られるものです。だからアーチャーリヤは、一般大衆を精神的な幸福へ導こうとします。ナイミシャーラニヤの聖者たちは、カリ時代という争乱に満ちた鉄の現代に生きる人々の無能さと、あらゆる面で悲運に見舞われることを予見し、すべての啓示經典の要点を説明してくれるようにスータ・ゴースヴァーミー

に頼みました。だからこそ、人々にとって究極的な善でもある絶対的な善について尋ねたのです。現代人がどれほど悲運な定めにあるかを次の節が説明しています。

第10節

प्रायेणात्पायुषः सभ्य कलावस्मिन् युगे जनाः ।
मन्दाः सुमन्दमतयो मन्दभाग्या ह्युपद्रुताः ॥ १० ॥

プラーイェーナルパーユシャハ サビヒヤ
prāyeṇālpāyusaḥ sabhya

カラウ ヲスミン ユゲー ジャナーハ
kalāv asmin yuge janāḥ

マンダーハ スマンダ・マタヨー
mandāḥ sumanda-matayo

マンダ・バハギーヤー ヒ ウパドウルターハ
manda-bhāgyā hy upadrutāḥ

prāyeṇa—ほとんどいつも; *alpa*—わずかな; *āyusaḥ*—寿命; *sabhya*—学識ある社会の一員; *kalau*—カリ（争い）の現代において; *asmin*—この中で; *yuge*—時代; *janāḥ*—民衆; *mandāḥ*—怠惰な; *sumanda-matayaḥ*—間違っ導かれている; *manda-bhāgyāḥ*—不運な; *hi*—そして、中でも; *upadrutāḥ*—乱されている。

博学なお方よ。カリという鉄の時代で、人類は短命になっています。喧嘩早く、怠惰で、誤って導かれ、不運で、とりわけいつも心が乱されています。

要旨解説

主の献愛者は、人々が精神的に高められることをいつも心から願っています。ナイミシャラニャの聖者たちはカリ時代の人々の生き様を分析し、寿命が短くなることを予見しました。カリ・ユガで寿命が短くなるのは、食料不足ではなく不規則な習慣が原因です。規則的な習慣を保ち、つましい食事をしていればだれでも健康でいられるものです。食べすぎ、過度の感覚満足、他人の厚意への頼りすぎ、さらに不自然な生活基準などが、人の活力そのものを奪いさってしまいます。そのために寿命が短くなるのです。

また現代人はひじょうに怠惰ですが、それは物質的な面だけではなく、自己を悟ることについてもあてはまります。人間生活はとくに自己を悟るためにあります。自分はだれなのか、こ

の世界はどういう場所なのか、最高の真理とはなにか、といった答を知る必要があるのです。人間生活は、物質界での生存競争の苦しみをすべて終わらせ、また自分の永遠なふるさどである神のもとに帰る機会です。しかし、人々は劣悪な教育にむしばまれているために、自己を悟る望みを持っていません。たとえその望みをいだいても、不運なことに、人を誤って導く指導者の犠牲になってしまいます。

現代人は、さまざまな政治思想や政治団体に巻き込まれているだけではなく、映画・スポーツ・賭博・ナイトクラブ・通俗な本を集めた図書館・悪いつきあい・喫煙・飲酒・詐欺・盗み・口論など、いたずらに感覚を楽しませようとする歓楽の犠牲にもなっています。種々雑多な物事にかかわっているために、心はいつもかき乱され、不安に満ちています。また、狡猾な人間たちが啓示経典を無視した勝手な宗教教義を作りだし、感覚満足にとらわれている人たちがよくそのような団体に惹かれます。その結果、宗教の名を騙って多くの悪事が行なわれ、人々は心の平安も体の健康もたもつことができません。学習者 (*brahmacāri*・ブラフマチャーリー) の共同社会はもはや維持されず、世帯者もグリハスタ・アーシュラマ (*gr̥hastha-āśrama*) の規定原則に従っていません。したがって、そのようなグリハスタ・アーシュラマからヴァーナプラスタ (*vānaprastha*) やサンニャシー (*sannyāsī*) になった人も、厳格な道からかんとんに逸れてしまいます。カリ・ユガでは、社会全体に無信仰の風潮が蔓延しています。だれも精神的な価値に関心をしめさなくなりました。いまでは、物質的な感覚満足が文化の基準になっています。そのような物中心の文化を存続させるために人々は複雑な国家や社会を作りだし、結果として、さまざまな組織間で武力衝突や冷戦による緊迫がつづけています。したがって、現代社会のゆがんだ価値観のために、精神的な基準を高めることはきわめて難しくなっています。ナイミシャラニャの聖者たちは、墮落した魂たちを束縛から解放させたいと切望しているからこそ、シュリーラ・スータ・ゴースヴァーミーにその救済策を求めているのです。

第 1 1 節

भूरीणि भूरिकर्माणि श्रोतव्यानि विभागशः ।
अतः साधोऽत्र यत्सारं समुद्धृत्य मनीषया ।
ब्रूहि भद्रायभूतानां येनात्मा सुप्रसीदति ॥ ११ ॥

ブーリーニ ブーリ・カルマーニ
bhūrīṇi bhūri-karmāṇi

シュロータヴァーニ ヴィバハーガシャハ
śrotavyāni vibhāgaśaḥ

アタハ サードホー トウラ ヤトウ サーランム
ataḥ sādho 'tra yat sāram

サムッドフウリチャ マニーシャヤー
samuddhṛtya manīṣayā

ブルーヒ バハドゥラーヤ プフターナーンム
brūhi bhadrāya bhūtānām

イエーナートウマー スプラシーダティ
yenātmā suprasīdati

bhūrīṇi—多種多様な; *bhūri*—多くの; *karmāṇi*—義務; *śrotavyāni*—学ぶべきこと; *vibhāgaśaḥ*—主題の分野によって; *ataḥ*—ゆえに; *sādho*—おお、聖者よ; *atra*—この中で; *yat*—なんであろうと; *sāram*—真髓; *samuddhṛtya*—選択によって; *manīṣayā*—あなたの知識にとって最善の; *brūhi*—どうか話してください; *bhadrāya*—～の利益のために; *bhūtānām*—生命体達; *yena*—それによって; *ātmā*—自己; *suprasīdati*—充分満足する。

「多種多様な経典があり、そのすべてに多くの規定義務が定められていますが、それはその各分野を長い歳月にわたって研究したあとに会得できるものです。聖者よ。ですから、すべての生命体の幸福のために、各経典の要点を選び、そしてご説明ください。そのような教えによってかれらの心は完全に満たされます」

要旨解説

アートマー・自己は物質要素とは違った存在です。その構造は精神的ですから、物質的な計画をどれほど用意してもアートマーは決して満足しません。すべての経典や精神的な教えはこの自己・アートマーを満足させるためにあります。さまざまな時代や場所の生命体が理解できるよう多種多様な方法が用意されていますから、その数に応じた啓示経典も用意されています。各経典にはさまざまな方法や規定義務が定められています。現代のカリ・ユガに生きる人々の墮落した状態を考慮したナイミシャーラニヤの聖者たちは、そのような経典の重要部分について話すよう求めました。現代に生きる墮落した魂たちが、ヴァルナ (*varṇa*) とアーシュラマ (*āśrama*) の制度にあるすべての責務を理解・実践することは不可能だからです。

ヴァルナとアーシュラマは、人間社会を精神的状態に高める最善の仕組みですが、カリ・ユガの影響のために、そのなかで定められている規則や原則が実行できなくなっています。さらに、ヴァルナーシュラマ制度がしめす家族との関係の遮断は、一般の人々ができるものではありません。社会全体がヴァルナーシュラマの仕組みとは逆の環境に置かれているのです。この

状況を考えれば、庶民が精神的に解放されるのはきわめて難しいことがわかります。聖者たちがこの問題についてシュリー・スータ・ゴースヴァーミーに求めた理由が、次の節で説明されます。

第 1 2 節

सूत जानासि भद्रं ते भगवान् सात्वतां पतिः ।
देवक्यां वसुदेवस्य जातो यस्य चिकीर्षया ॥ १२ ॥

スータ ジャーナシ バドゥランム テー
sūta jānāsi bhadrām te

バガヴァーン サトウヴァターナム パティヒ
bhagavān sātvatām patiḥ

デーヴァキヤーンム ヴァスデーヴァッシャ
devakyām vasudevasya

ジャートー ヤッシャ チキールシャヤー
jāto yasya cikīṣayā

sūta—おお、スータ・ゴースヴァーミー; *jānāsi*—あなたは知っています; *bhadrām te*—あなたにすべての祝福がありますように; *bhagavān*—人格主神; *sātvatām*—純粋な献愛者の; *patiḥ*—保護者; *devakyām*—デーヴァキーの胎内に; *vasudevasya*—ヴァスデーヴァによって; *jātaḥ*—～から誕生した; *yasya*—～の目的で; *cikīṣayā*—実行すること。

スータ・ゴースヴァーミー様。あらゆる祝福があなた様にそそがれますように。あなた様は、人格主神がヴァスデーヴァの子としてデーヴァキーの胎内に現われた目的をご存知です。

要旨解説

Bhagavān・バガヴァーンとは、すべての富・力・名声・美しさ・知識・放棄心の支配者である全能の神のことです。また、純粋な献愛者を守る方でもあります。神はだれとでも平等に接しますが、献愛者にはとくに好意をいただきます。Sat (サトゥ) は絶対真理者を、そして絶対真理者に仕える人々を *sātvata* (サトウヴァタ) といいます。そして、その純粋な献愛者を守る人格主神は「サトウヴァタを守る方」という名前知られています。*Bhadrām te* (バドゥラン テー) 「あなた様に祝福あれ」という言葉には、語り手の言葉をとおして絶対真理者について知りたいという聖者たちの強い願いがこめられています。主シュリー・クリシュナ、最高人格主神は、

ヴァスデーヴァの妻デーヴァキーをとおして降誕しました。ヴァスデーヴァは、至高主が降誕する超越的な境地のシンボルです。

第13節

तत्रः शुश्रूषमाणानामर्हस्युरानुवर्णितुम् ।
यस्यावतारो भूतानां क्षेमाय च भवाय च ॥ १३ ॥

タン ナハ シュシュルーシャマーナーナーンム
tan naḥ śuśrūṣamāṇānām

アルハシ アンガーヌヴァルニトウンム
arhasy aṅgānuvarṇitum

ヤッシャーヴァターロー プーターナーンム
yasyāvatāro bhūtānām

クシェーマヤ チャ バハヴァーヤ チャ
kṣemāya ca bhavāya ca

tat—それら; *naḥ*—私達に; *śuśrūṣamāṇānām*—~のために努力している者達; *arhasi*—それをする義務がある; *aṅga*—おお、スータ・ゴースヴァーミー様; *anuvārṇitum*—先代のアーチャーリヤの足跡に従って説明すること; *yasya*—~の者達の; *avatāraḥ*—化身; *bhūtānām*—生命体達の; *kṣemāya*—善のために; *ca*—そして; *bhavāya*—高められること; *ca*—そして。

スータ・ゴースヴァーミー様。私たちは人格主神とその化身について学ぶことを切望しています。先代の師（アーチャーリヤ）たちからさずかった教えをご説明ください。それらを語り、聞くことで人は高められるからです。

要旨解説

絶対真理者に関する超越的な教えを聞く条件が、この節で説明されています。最初の条件は、聞き手がひじょうに真剣に、そして熱心に聞こうとしていることです。そして語り手は、承認されたアーチャーリヤからの師弟継承上にいる人物でなくてはなりません。絶対者に関する超越的な情報は、物質的な人には理解できません。正しい精神指導者に導かれている人は徐々に純粋になっていきます。ですから、師弟継承のつながりに身をゆだね、従順な心で聞くという精神的な技術を学ばなくてはなりません。スータ・ゴースヴァーミーとナイミシャーラニヤの

聖者たちの場合、これらの条件がすべて満たされていました。なぜなら、シュリーラ・スータ・ゴースヴァーミーはシュリーラ・ヴァーサデーヴァの継承上にあり、ナイミシャラニヤの聖者たちは、真理を熱心に学ぼうとする誠実な魂だったからです。このように、主シュリー・クリシュナの超人間的活動、主の化身、主の誕生、出現と他界、主の姿や名前などに関する超越的な話題は、すべての条件が満たされているからこそかんたんに理解できます。そのような話し合いは、精神的な悟りの道を歩くすべての人の助けになるのです。

第 1 4 節

आपन्नः संसृतिं घोरं यन्नाम विवशो गृणन् ।
ततः सद्यो विमुच्येत यद्विभेति स्वयं भयम् ॥ १४ ॥

アーパンナハ サンムスリティンム ゴホーラーンム
āpannaḥ saṁsṛtiṁ ghorām

ヤン・ナーマ ヴィヴァショー グリナン
yan-nāma vivaśo gr̥ṇan

タタハ サデヨー ヴィムツチェータ
tataḥ sadyo vimucyeta

ヤドゥ ビベヘーティ スヴァヤン バハヤンム
yad bibheti svayam bhayam

āpannaḥ—束縛されて; *saṁsṛtiṁ*—誕生と死という苦境において; *ghorām*—あまりにも複雑な; *yat*—～のもの; *nāma*—絶対的な名前; *vivaśaḥ*—無意識に; *gr̥ṇan*—唱えること; *tataḥ*—それから; *sadyaḥ*—すぐに; *vimucyeta*—自由を得る; *yat*—するもの; *bibheti*—恐れ; *svayam*—個人的に; *bhayam*—恐れそのもの。

誕生と死の複雑な網に絡まっている生命体は、恐怖の権化さえ恐れるクリシュナの聖なる名前を唱えれば、たとえ無意識であっても、すぐに自由の身になることができます。

要旨解説

ヴァースデーヴァ、すなわち主クリシュナ、絶対人格主神は万物の支配者です。創造界のなかに、全能者の怒りを恐れない者はだれもいません。並はずれた力を持つラーヴァナ (Rāvaṇa)、ヒラニヤカシプ (Hiraṇyakaśipu)、カムサ (Kamsa) のような強大な悪魔たちも、人格主神に殺されました。その全能のヴァースデーヴァは、自らの名前に自分の力をこめています。す

べては主とつながりを持ち、そのつながりにもとづく個性を持っています。この節では、クリシュナの名前は恐怖の権化にでさえ恐れられる、と述べられています。これは、クリシュナの名前はクリシュナ自身となんら違いがないことをしめしています。つまり、クリシュナの名前には主クリシュナと同じ力がある、ということです。まったく違いがないのです。ですから、だれであっても、最大の危機に直面したときに主シュリー・クリシュナの聖なる名前の力にすがることができます。クリシュナの崇高な名前は、たとえ無意識に唱えても、ある状況で強いられて唱えても、誕生と死という苦境から解放を得る助けになってくれます。

第15節

यत्पादसंश्रयाः सूत मुनयः प्रशमायनाः ।
सद्यः पुनन्त्युपस्पृष्टाः स्वर्धुन्यापोऽनुसेवया ॥ १५ ॥

ヤトウ・パーダ・サンムシュラヤーハ スータ
yat-pāda-samśrayāḥ sūta

ムナヤハ プラシャマーヤナーハ
munayaḥ praśamāyanāḥ

サデヤハ プナンティ ウパスプリシュターハ
sadyaḥ punanti upasprṣṭāḥ

スヴァルドフウニ・アーポ ヌセーヴァヤー
svardhuni-āpo 'nusevayā

yat—～である人の; *pāda*—蓮華の御足; *samśrayāḥ*—～に身をゆだねた者達; *sūta*—おお、スータ・ゴースヴァーミー; *munayaḥ*—偉大な聖者達; *praśamāyanāḥ*—至高主への信仰に没頭している; *sadyaḥ*—すぐに; *punanti*—浄化; *upasprṣṭāḥ*—ふれあうだけで; *svardhuni*—神聖なガンジス川の; *āpaḥ*—水; *anusevayā*—使用すること。

スータ様。主の蓮華の御足にすべてをゆだねた偉大な聖者たちは、かれらと交流する人をたちどころに清めてくれます。しかしガンジス川の水は、長いあいだ使わなければ浄化してくれることはありません。

要旨解説

主の純粋な献愛者は、神聖なガンジス川の水よりも力をそなえています。ガンジス川の水は、長く使うことで精神的な恩恵がさずかります。いっぽう、主の純粋な献愛者の慈悲をさずかる

人はすぐに清められます。『バガヴァッド・ギーター』では、シュードラ、女性、商人など、どのような境遇に生まれた人でも主の蓮華の御足に身をゆだねることができ、そうすれば神のもとに帰ることができる、と説かれています。主の蓮華の御足に身をゆだねるといことは、純粋な献愛者に身をゆだねることでもあります。仕えることを唯一の務めとする純粋な献愛者は、主の蓮華の御足の代表者であることをしめすプラブパーダ (Prabhupāda) やヴィシュヌパーダ (Viṣṇupāda) という名前で讃えられます。ですから、純粋な献愛者を自分の精神指導者として受け入れ、その人物の蓮華の御足に身をゆだねる人はだれでも、すぐに清められます。そのような主の献愛者は主に対してもっとも親密な奉仕をしているので、主と等しく讃えられます。ふるさとへ、自分のもとへ戻してあげたいと主が願っている墮落した魂たちを、物質界から救いだしているからです。啓示経典は、そのような純粋な献愛者を主の代理者と呼んでいます。純粋な献愛者に仕える誠実な弟子は師を主と同じように見ますが、自分のことは主の召し使いの慎ましい召し使いである、といつも考えています。これが純粋な献愛奉仕の道です。

第 16 節

को वा भगवतस्तस्य पुण्यश्लोकेड्यकर्मणः ।
शुद्धिकामो न शृणुयाद्यशः कलिमलापहम् ॥ १६ ॥

コー ヴァー バハガヴァタス タツシャ
ko vā bhagavatas tasya

プニャ・シュローケーダヤ・カルマナハ
puṇya-ślokeḍya-karmaṇaḥ

シュッデヒイ・カーモー ナ シュルヌヤードウ
śuddhi-kāmo na śṛṇuyād

ヤシャハ カリ・マラーパハンム
yaśaḥ kali-malāpahaṁ

kaḥ—だれが; vā—むしろ; bhagavataḥ—主の; tasya—主の; puṇya—徳の高い; śloka-īḍya—祈りによって崇拜できる; karmaṇaḥ—行ない; śuddhi-kāmaḥ—すべての罪からの救いを望むこと; na—～でない; śṛṇuyāt—聞く; yaśaḥ—栄光; kali—争いの時代の; mala-apahaṁ—浄化のための代理者。

争いの時代の罪から救われたいと願う者はいるでしょうか、主の高潔な栄光を聞く望みを持たない者はいるでしょうか。

要旨解説

カリ時代は、争いという特質に満ちているために、もっとも不運な時代だとされています。またこの時代には悪癖が蔓延しているため、ちょっとした誤解から大きな衝突が起こります。主への純粋な奉仕に打ちこんでいる人々は、富や力を増大させる望みもなく、活動の結果にとらわれたり無味乾燥な哲学的推論に惑わされたりすることなく、この複雑な時代の束縛から抜け出すことができます。大衆の指導者は世界の平和や友好関係を求めているものの、主の栄光を聞くという単純明快な方法を知りません。それどころか、主を讃える運動に反対しています。言いかえれば、愚かな指導者たちは主の存在を完全に否定しようとしているのです。宗教にとらわれない国と称して、毎年さまざまな計画を作っていますが、だれも逆らうことのできない複雑な物質自然界にはばまれ、どの計画も挫折しています。かれらには、平和と友好の世界への試みが打ち砕かれている現実を見る目がないのです。しかし、その障害を乗り越えるヒントがここに用意されています。ほんとうの幸福を求めるとすれば、至高主クリシュナを理解するための道を切りひらき、『シュリーマド・バーガヴァタム』のすべてのページに描写されている主の高潔な行動を理解したうえで、主を讃えなくてはなりません。

第 17 節

तस्य कर्माण्युदाराणि परिगीतानि सूरिभिः ।
ब्रूहि नः श्रद्धधानानां लीलया दधतः कलाः ॥ १७ ॥

タッシャ カルマーニ ウダーラーニ
tasya karmāṇy udārāṇi

パリギーターニ スーリビヒ
parigītāni sūribhiḥ

ブルーヒ ナハ シュラッタダハーナーナム
brūhi naḥ śraddadhānānām

リーラヤー ダダハタハ カラーハ
līlayā dadhataḥ kalāḥ

tasya—主の; *karmāṇi*—超越的な活動; *udārāṇi*—寛大な; *parigītāni*—広める; *sūribhiḥ*—偉大な魂達によって; *brūhi*—どうか、お話しください; *naḥ*—私達に; *śraddadhānānām*—敬意をこめて受ける準備ができている; *līlayā*—娯楽; *dadhataḥ*—降誕した; *kalāḥ*—化身。

主の崇高な活動は壮大で優雅であり、ナーラダのような偉大で博識な聖者たちが詠いあげています。ですから、どうか、主がさまざまな化身となってくりひろげた冒険について、真剣に聞こうとしている私たちにお話してください。

要旨解説

知性に欠ける人たちは「神はなにもしない」と言いますが、それは違います。主の活動は壮大で包容力にあふれています。主が創造した物質界も精神界も素晴らしい世界であり、多様性に満ちあふれています。その活動は、シュリーラ・ナーラダ、ヴァーサ、ヴァールミーキ、デーヴァラ、アシタ、マドウヴァ、シュリー・チャイタンニャ、ラーマヌジャ、ヴィシュヌスヴァーミー、ニンバルカ、シュリダラ、ヴィシュヴァナータ、バラデーヴァ、バクティヴィノーダ、シッダーンタ・サラスヴァティーなど、数多くの博識で自己を悟った魂によって巧みに説明されています。物質・精神両方の世界も富や美や知識に富んでいますが、精神的な領域は知識と至福と永遠性に満たされているため、物質界よりも壮大です。物質創造界は精神的王国のゆがんだ影として一定期間存続しますが、それは映画にたとえることができます。物質界は、絵空事にまどわされる知性の足りない人々を魅了させます。そのような人々は真実の世界を知らないため、虚像にすぎない物質現象界をすべてと見え、現実の世界と思ひこんでいます。いっぽう、ヴァーサやナーラダのような聖者に導かれている知性のある人なら、神の永遠なる王国は快適で、広大で、永遠に至福と知識にあふれていることを知っています。しかし、主の活動や崇高な世界について知らない人でも、化身となって冒険をくりひろげる主によって恩寵をさずかることがあります。主はその冒険のなかで、超越的世界での献愛者との交流という永遠な喜びを私たちに見せます。そのような活動をとおして、物質界にいる条件づけられた魂たちを魅了させるのです。物質的感覚といういつもの楽しみを味わったり、また精神界に真実の生活があることを否定したりするだけの条件づけられた魂たちがいます。このような浅はかな人々は、カルミー (karmī) 「果報的活動者」やギャーニー (jñānīs) 「無味乾燥な推論家」と呼ばれています。しかしこの2種類の人々の上に、過度の物質的活動にも物質的推論にもとらわれないサートゥヴァタ (sātvata) 「献愛者」という超越主義者がいます。主への積極的な奉仕に励み、カルミーやギャーニーには理解できない至上の精神的恩恵をさずかっています。

主は物質・精神両世界の最高支配者として、数え切れない種類の化身として降誕します。ブラフマー (Brahmā)、ルドウラ (Rudra)、マヌ (Manu)、プリトゥ (Pṛthu)、ヴァーサ (Vyāsa) などは物質的質をそなえた化身ですが、ラーマ (Rāma)、ナラシンハ (Narasimha)、

ヴァラーハ (Varāha) 、ヴァーマナ (Vāmana) などは超越的な化身です。主シュリー・クリシュナはこれらの化身の源ですから、すべての原因の原因です。

第 18 節

अथाख्याहि हरेर्धर्मवतारकथाः शुभाः ।
लीला विदधतः स्वैरमीश्वरस्यात्ममायया ॥ १८ ॥

アタハーキヤーヒ ハレール デヒーマン
athākhyāhi harer dhīmann

アヴァターラ・カタハーハ シュバハーハ
avatāra-kathāḥ śubhāḥ

リーラー ヴィダダハタハ スヴァイランム
līlā vidadhataḥ svairam

イーシュヴァラッシャートウマ・マーヤヤー
īśvarasyātma-māyayā

atha—ですから; *ākhyāhi*—説明する; *hareḥ*—主の; *dhīman*—おお、聡明な方よ; *avatāra*—化身; *kathāḥ*—話の; *śubhāḥ*—吉兆な; *līlā*—冒険; *vidadhataḥ*—行なわれた; *svairam*—娯楽; *īśvarasya*—最高支配者の; *ātma*—個人的な; *māyayā*—エネルギー。

聡明なるスータ様。どうか、最高主神のさまざまな化身が行なった崇高な娯楽についてお聞かせください。最高の支配者である主のそのような吉兆な冒険と娯楽は、主の内的力によって行なわれます。

要旨解説

至高主、人格主神は、物質界の創造・維持・破壊のためにみずから数えきれないほどの化身となって現われ、その崇高な姿で繰りひろげられる冒険はどれも吉兆です。その活動が行なわれていたときにいあわせた人も、その娯楽に関する超越的な話を聞く人も、同じように恩恵をさずかることができます。

第 19 節

वयं तु न वितृष्याम उत्तमश्लोकविक्रमे ।
यच्छृण्वतां रसज्ञानां स्वादु स्वादु पदे पदे ॥ १९ ॥

ヴァヤナム トウ ナ ヴィトウリピヤーマ

vayaṁ tu na vitṛpyāma

ウッタマ・シュローカ・ヴィクラメー

uttama-śloka-vikrame

ヤチ・チリンヴァターナム ラサ・ギャーナナム

yac-chṛṇvatām rasa-jñānām

スヴァードウ スヴァードウ パデー パデー

svādu svādu pade pade

vayaṁ—私達；*tu*—しかし；*na*—～ではない；*vitṛpyāmaḥ*—休むであろう；*uttama-śloka*—人格主神、超越的な祈りで讃えられる方；*vikrame*—冒険；*yac*—～であるもの；*śṛṇvatām*—絶え間なく聞くことで；*rasa*—面白み；*jñānām*—～に精通している人々；*svādu*—味わうこと；*svādu*—美味な；*pade pade*—毎瞬間。

私たちは、讃歌や祈りによって讃えられる人格主神の崇高な娯楽を、決して聞き飽きることはありません。主との超越的な絆に対する味わいをはぐくんだ者は、毎瞬間、主の娯楽を聞いて楽しむのです。

要旨解説

通俗な物語や歴史と主の超越的な娯楽のあいだには大きな違いがあります。全宇宙の歴史には、主の化身の娯楽に関する記述が含まれています。『ラーマーヤナ』、『マハーバーラタ』、各『プラーナ』には、主の化身の娯楽に関連した太古の歴史が収められているので、繰り返して読んでも生き生きと読者に訴えかけてきます。たとえば、『バガヴァッド・ギーター』や『シュリーマド・バーガヴァタム』を一生繰り返して読みつづけても、だれでも新しい光を見いだすことができます。俗なニュースには活気がなく、超越的なニュースは躍動しています—物質には活気がなく、精神魂は躍動的だからです。超越的な話題を理解する味わいを高めた人たちは、そのような話題を聞き飽きることはありません。俗なことはすぐに退屈してしましますが、超越的な、あるいは献愛奉仕に飽きることはありません。*Uttama-śloka* (ウッタマ・シュローカ) は、無知な人間のための文献ではないことを表わしています。通俗な文献は暗闇、つまり無知の様式にあります。超越的な文献はまったく違います。超越的な文献は暗闇の様式を超えており、読み進むにつれ、そして超越的な主題を悟るにつれ、その輝きは増していきます。解放を達成した人たちでさえ、*aham brahmāsmi* (アハン ブラフマースミ) という言葉を繰り返して

も、心は決して満たされません。そのような上辺だけのブラフマンの悟りはやがては新鮮さを失うものですから、ほんとうの喜びを味わおうとして、かれらは『シュリーマド・バーガヴァタム』の言葉に耳を傾けるようになります。いっぽう、不運な人は利他主義や俗な慈善活動にかかわるようになります。これは、マーヤーヴァーダ哲学は通俗であるのにたいし、『シュリーマド・バーガヴァタム』は超越的であることを物語っています。

第20節

कृतवान् किल कर्माणि सह रामेण केशवः ।
अतिमर्त्यानि भगवान् गूढः कपटमानुषः ॥ २० ॥

クリタヴァーン キラ カルマーニ
kṛtavān kila karmāṇi

サハ ラーメーナ ケーシャヴァハ
saha rāmeṇa keśavaḥ

アティマルチャーニ バハガヴァーン
atimartyāni bhagavān

グーダハ、カパタ・マーヌシャハ
gūḍhaḥ kapaṭa-mānuṣaḥ

kṛtavān—～によって為された; *kila*—～であること; *karmāṇi*—行動; *saha*—～とともに; *rāmeṇa*—バララーマ; *keśavaḥ*—シュリー・クリシュナ; *atimartyāni*—超人間的; *bhagavān*—人格主神; *gūḍhaḥ*—～として自らを隠し; *kapaṭa*—見たところ; *mānuṣaḥ*—人間。

人格主神・主シュリー・クリシュナはバララーマとともに、あたかも人間のように振舞い、正体を隠しつつ多くの超人間的な活動を行ないました。

要旨解説

神人同形論と獣形神観は、シュリー・クリシュナ、人格主神には決して当てはまりません。改悛と苦行の力で人間は神になれるという理論は、現代では特にインドなどで蔓延しています。主ラーマ、主クリシュナ、主チャイタンニャ・マハープラブは、啓示経典が記述するとおりの人格主神であると聖者や賢者たちによって気づかれたため、不誠実な人間たちが自分勝手に化身を作りだしています。神の化身をでっちあげることは、特にベンガル地方では日常茶飯事になっています。ちょっとした超能力を持つ有名人が奇術を披露し、一般人の多数決でいともた

やすく神になれるのです。主シュリー・クリシュナはそのたぐいの化身ではありません。降誕したその瞬間から、正真正銘の人格主神でした。4本腕のヴィシュヌとして母親のまえに姿を現わしたのです。そして、母親の頼みを聞きいれて子どもの姿になり、すぐにゴークラにいる別の献愛者のもとに行き、そこでナンダ・マハーラージャとヤショーダー・マーターの子として育てられました。同じように、主シュリー・クリシュナの分身とも言うべきシュリー・バラデーヴァも、シュリー・ヴァスデーヴァの別の妻に誕生した人間の子どもと考えられていました。『バガヴァッド・ギーター』で主は、主の誕生と活動は超越的であり、その超越的な特質を理解する幸運な人は解放され、神の国に帰っていくことができる、と言いました。ですから、主シュリー・クリシュナの超越的な誕生と行動の特質を知ることは解放の達成に充分です。『シュリーマド・バーガヴァタム』では、主の超越的な質について9つの編で述べられ、第10章では特別な娯楽について取りあげられています。このことは、本書を読みすすむうちに明らかにされていきます。しかしここで特筆すべきことは、主は母親の膝の上にいたときから神の証をしめし、主の行為はすべて超人間的であり（7歳のときにゴヴァルダンの丘を持ちあげています）、どの行為も主がまさに最高人格主神であったことを裏づけたということです。それでも、主の神秘のベールのために、父、母、親族たちには、いつでもふつうの人の子の振舞いしか見えませんでした。主がなにか途方もないことをしても、両親はきまってほかの意味にとっていました。そして我が子へのゆるぎない愛情に満たされていました。だからこそナイミシャーラニヤの聖者たちは、主について、人間のようには見えても、じつは最高かつ全能の人格主神である、と述べたのです。

第21節

कलिमागतमाज्ञाय क्षेत्रेऽस्मिन् वैष्णवे वयम् ।
आसीना दीर्घसत्रेण कथायां सक्षणा हरेः ॥ २१ ॥

カリナム アーガタナム アーギヤーヤ
kalim āgatam ājñāya

クシュートウレー スミン ヴァイシュナヴェー ヴァヤナム
kṣetre 'smin vaiṣṇave vayam

アーシーナー ディールガハ・サトウレーナ
āsīnā dīrgha-satreṇa

カタハーヤーンム サンクシャナー ハレーハ
kathāyām sakṣaṇā hareḥ

kalim—カリの時代（争いの鉄の時代）；*āgatam*—到来して；*ājñāya*—このことを知って；*kṣetre*—この場所で；*asmin*—これの；*vaiṣṇave*—特に主の献愛者のためにある；*vayam*—私達；*āsināḥ*—座って；*dirgha*—長く；*satreṇa*—儀式を執行するために；*kathāyām*—～の言葉の中に；*sa-kṣaṇāḥ*—私達が自由に使える時間で；*hareḥ*—人格主神の。

私たちは、カリ・ユガがすでに始まっていることをよく認識したうえで、神の超越的な教えを長期にわたって聞くためこの聖地に集まり、儀式を執行いたします。

要旨解説

カリという現代は、サチャ・ユガ「黄金の時代」、トゥレーター・ユガ「銀の時代」、ドゥヴァーパラ・ユガ「銅の時代」に比べると、自己を悟る環境にはまったく適しません。サチャ・ユガの人々は、自己を悟るために10万年間生きることができ、長い歳月にわたって瞑想を修練することができました。トゥレーター・ユガでの寿命は1万年で、盛大な儀式をすることで自己を悟ることができました。そしてドゥヴァーパラ・ユガでは寿命が1,000年になり、自己の悟りは主を崇拝すること達成できました。しかしカリ・ユガになると寿命は長くてもせいぜい100年になり、しかもさまざまな困難がつきまとうため、自己を悟る方法として、主の聖なる名前・名声・娯楽などについて聞くことが勧められています。ナイミシャーラニャの聖者たちは、この方法を、特に主の献愛者のために用意されている場所ではじめました。1,000年間、主の崇高な娯楽について聞く準備をしていたのでした。私たちも聖者たちを模範とし、自己を悟る唯一の方法である『シュリーマド・バーガヴァタム』を定期的に聞き、吟唱することを学ばなくてはなりません。ほかの方法を修練しても、確かな結果は得られないのですから、それは時間の無駄にすぎません。主シュリー・チャイタンニャ・マハープラブはこのバーガヴァタ・ダルマの方法を広め、インドに生まれたすべての人々が『バガヴァッド・ギーター』を中心に、主シュリー・クリシュナの教えを普及させる責任をまっとうするよう勧めました。『バガヴァッド・ギーター』の教えを十分に理解した人は、自己のさらなる悟りを求めて『シュリーマド・バーガヴァタム』の研究をはじめることができます。

第22節

त्वं नः सन्दर्शितो धात्रा दुस्तरं निस्तितीर्षताम् ।
कलिं सत्त्वहरं पुंसां कर्णधार इवार्णवम् ॥ २२ ॥

トゥヴァンム ナハ サンドルシトー ダハートウラー
tvam naḥ sandarsīto dhātrā

ドウスタランム ニスティティールシャターンム
dustaram nistitīrṣatām

カリナム サットウヴァ・ハランム プンサーナム
kalim sattva-haram puṁsām

カルナ・ダハーラ イヴァールナヴァンム
karṇa-dhāra ivārṇavam

tvam—あなた; *naḥ*—私達に; *sandarsītaḥ*—会うこと; *dhātrā*—神の導きによって; *dustaram*—克服できない; *nistitīrṣatām*—渡ろうと望んでいる者達のために; *kalim*—カリ時代; *sattva-haram*—良い質を悪化させるもの; *puṁsām*—人間の; *karṇa-dhāraḥ*—船長; *iva*—～として; *arṇavam*—海。

私たちは、神の御心によってあなた様に会うことができたと考えています。こうしてお会いできたからこそ、人間の美質を衰退させる危険なカリの大海を船で渡りきろうとする私たちが、あなた様を船長として迎え入れることができるのです。

要旨解説

カリ時代は人類にとってひじょうに危険です。人間生活は自己を悟るためだけに用意されているのですが、この危険な時代に生きているために、人々は人生の目標を完全に忘れていきます。寿命もさらに減少していきます。記憶、こまやかな情緒感、力、優れた気質も失われていくことでしょう。この時代の異常さについては本書の第10編で取りあげられています。現代は、自己を悟るために生涯を活用したいと願う人には苦難の時代と言えます。だれもが感覚満足に奔走するあまり、自己の悟りのことをすっかり忘れていきます。狂気ゆえに、「自己の悟りなど必要ない」とまで言いはなつ人もいます。この短い生涯が、自己を悟る大いなる旅路の一刹那であることに気づいていないのです。教育制度すべてが感覚を満足させるために用意されていますが、聡明な人は状況を正しく判断し、現代の子どもたちは教育と呼ばれる屠殺場に送りこまれていることに気づくはずです。ですから、博識な人はこの時代に対する警戒心を持たなくてはなりませんし、カリという危険な大海を渡ろうとするのであれば、ナイミシャーラニヤの聖者たちの足跡に従い、シュリー・スータ・ゴースヴァーミーやその正しい代表者を船長として迎え入れなくてはなりません。この船は、『バガヴァッド・ギーター』あるいは『シュリーマド・バーガヴァタム』という姿をした主シュリー・クリシュナのメッセージです。

第23節

ब्रूहि योगेश्वरे कृष्णे ब्रह्मण्ये धर्मवर्मणि ।
स्वां काष्ठामधुनोपेते धर्मः कं शरणं गतः ॥ २३ ॥

ブルーヒ ヨーゲーシュヴァレー クリシュネー
brūhi yogeśvare kṛṣṇe

ブラフマニエー ダハルマ・ヴァルマニ
brahmaṇye dharma-varmaṇi

スヴァーンム カーシュタハーンム アドフウノーペーテー
svām kāṣṭhām adhunopete

ダハルマハ カンム シャラナンム ガタハ
dharmah kam śaraṇam gataḥ

brūhi—どうか、お話してください; *yoga-īśvare*—すべての神秘的力の主; *kṛṣṇe*—主クリシュナ; *brahmaṇye*—絶対真理者; *dharma*—宗教; *varmaṇi*—保護者; *svām*—自らの; *kāṣṭhām*—住居; *adhunā*—今; *upete*—去ってしまった; *dharmah*—宗教; *kam*—～の者に; *śaraṇam*—身を寄せる場所; *gataḥ*—行った。

絶対真理者、そしてすべての神秘的力の主 (ぬし) であるシュリー・クリシュナが自らの住居に向けて去っていかれました。ですからどうか、いま、宗教原則がだれに守られているのかお話してください。

要旨解説

宗教とは人格主神自身によって宣言された法律です。宗教原則がいちじるしく誤用されたり無視されたりするときには、その宗教原則を修復するためにいつでも至高主自ら降誕します。このことは『バガヴァッド・ギーター』でも述べられています。ナイミシャラニヤの聖者たちがその原則について尋ね、その答はのちに明らかにされます。『シュリーマド・バーガヴァタム』は人格主神の崇高な音の権化ですから、超越的な知識と宗教原則の記述で満ちあふれています。

これで、『シュリーマド・バーガヴァタム』の第1編・第1章、「聖者たちの質問」に関するバクティヴェーダントの要旨解説を終了します。